

魔境踏査の術を知る —カミュの「不条理」に学ぶ—

山口大学教育学部社会科教育選修4年 福田 理奈

はじめに

できる限り誠実に生きたい、というのは私の目標であるが、では誠実な生き方とは一体何だろうか。他者を思いやる、常に正直である、真面目である……といった複数の意味があるように思われる。例えば、「他人を思いやった結果嘘をついた」「正直ではあるが配慮に欠ける」といった場合など、誠実さの要素同士が矛盾することもある。さらに、人は常に、あるいは真に誠実であることはできるのだろうか。

私自身の考えとしては、誠実さとは「自分にも他人にも嘘をついてはならない」ということが最もイメージとして大きい。利己的か利他的かに関わらず、何かを偽ること自体を忌避すべきだと考えている。だがこれもまた徹底するのは難しい。普通、人間には確実に正しいと言えるものが何もないからである。例えば、今まさに私やあなたが見聞きし感じる物事が本当は存在せず、ただ脳に電気信号が送られているから知覚しているに過ぎないという想像が可能であるように、可能性があるというだけで、私たちが普段疑うことのないことが全て確実ではなくなってしまう。そして何が正しいのか、私たちが確かめる術はない。だから、人間が物事を理解するというのは言葉や説明によってそうした曖昧で決まり切っていない未知を押し込めているようなものなのだ。そうして、私たちは日頃から、半ば無意識に自分が思った以上のことを言ったり、不確実なことを断言したりするといった嘘をついているのである。

世界に対する疑いが生じた瞬間、私たちが慣れ親しんだ世界は内側から膨張する。物事の確実ならざる部分、それも人知の及ばない未知が、その上に被さって押し込めていた理論や定義を脆弱な虚構とみなし崩壊させ、何ものも確実ではなくなった世界が立ち現れる。その後に残る最早人為の及ばない世界を、私は「魔境」と呼ぶことにした。

嘘をつかない、何も偽らないという誠実について考えるなら、私はこの魔境に向き合い、さらにその上で、私の肉体を生かす所である人間社会、ただし荒涼とした魔境を内包している虚構に迎合することなく生きることを考えなければならない。ここにおいては何かを明らかにすることよりも、どう生きていくかということの方が重要だと思うのだ。虚構と魔境、その二重の世界を踏査する術を知ること、それが本研究の目的である。

1 研究方法

文献研究と、それを基にして「何も偽らない」というイメージを出発点とした「誠実な生き方」の考察を行った。本研究を行うにあたっては「不条理」を扱ったアルベール・カミュの著書に大きな影響を受けたため、今回はカミュの著作のうち『シーシュポスの神話』『異邦人』を主に取り扱い、そこから読み取れる思想を解釈したうえで、考察に活用した。

2 不条理の哲学 —— 『シーシュポスの神話』

(1) 不条理とは

カミュは「この世界は何ものも確実ではない」という考えを始点とし、その問題を回避せずに生きる方法を考え、「不条理」を中心とする思想を展開した。この「不条理の哲学」の根本思想を展開・追求したものが、『シーシュポスの神話』である。

『シーシュポスの神話』を訳した清水は、原本で用いられる語のうち形容詞 *absurde* を「不条理な」、名詞 *l'absurde*, *l'absurdité* をそれぞれ「不条理」「不条理性」と訳している (p.138)。通常 *absurde* は「なんとも筋道の通らない」「意味をなさない」「荒唐無稽な」という意味だが、カミュはこの言葉に「この世界が理性では割り切れず、しかも人間の奥底には明晰を求める死物狂いの願望が激しく鳴りひびいていて、この両者がともに相対峙したままである状態」という特別な意味を与えている (p.98)。人間が世界を理解しようとするのは、この世界を人間的な言葉による説明へと還元し、世界を親しみのある明晰なものにしたいという本能的な欲求があるからだ。しかし、世界はそれに対して確実なものを何も与えてくれない。このような人間の理性と割り切れない世界との対立という状況にのみ、不条理は成立する。

不条理を感じられるような場面は、日常の場面にもよくみられる。例えば、私は私のことを説明するのに所属や役割などの要素を挙げることはできるが、その役割や要素自体が「私」というわけではない。ではそうしたものに頼らず自己紹介をするとすると、自分というものが実は捉えどころがなく、空虚なものではないかというように思えてくる。この場合、不条理を回避しないという場合、私は自分が本来は何者でもないこと、私に着せかけられたものには何の意味もないことを認めなくてはならないのである。

このように不条理は人間が抱える根本的な問題として深い実感を与える観念であるから、カミュは不条理の確実さを検討しつつ、その真実に背くことなく、導かれる帰結に至るまで一貫した態度でいることが誠実な生き方だと述べる。つまり不条理を維持し続けるため、この世界は何も確実ではないと知ったうえで、物事を本当に知ろうとする理性も否定せずに生きることが誠実だとしている。不条理の体験に基づいて、果ての無い世界の中で思考を生かし続け、不条理を回避しないという「不条理な人間」でいることは可能か、というカミュの問いかけは、「何も偽らないためには」ということを考えるうえで大いに参考になるだろう。

(2) 不条理への回答

不条理の存在を感じ取ったとき、人は「そんなことを考えるだけ時間の無駄だ」と日常の中に無意識に回帰していくか、思考を進めていくかという選択をする。前者はある意味では思考の無力を認めることだ。私たちが知っている（ふりをしている）親しみ深い合理的な世界に帰るなら、衝突と不条理は消え去り、不条理自体も消えてしまうだろう。一方後者は、その思考の果てにさらに選択を迫られる。思考を殺すか、自らを殺すか、あるいは不条理な人生を生き抜くかである。そしてその選択は、不条理そのものの存亡にも関わ

るものである。

思考を殺すとは、最終的には人間の思考や理性が全く役に立たないものだとして、理解の及ばないものに「神」やそれに準ずるものの名前を付けてしまうような態度だ。カミュはシェストフ、キルケゴールら哲学者の思想を分析・批判し、こうした態度を「哲学上の自殺」と呼んだ。世界には我々が理解したくても理解できぬものがある、それはなぜか、神がいるからだ！と神の存在を証明し、神がもたらす幸福な来世や天国といった希望へと飛躍してしまう。しかしこのとき、不条理の本質である理性と世界の対立が、理性の敗北によって消え去ってしまう。思考が思考自体を否定し、考えるのを止めてしまうと、それは不条理そのものからの逃避となってしまう。なお、カミュは神や上位存在の存在を肯定も否定もしない。ただ、確信が持てないものが示す善悪や規範よりも、自らが知っているものにだけ基づいて自身の行動を規律する方法を探しているのである。

あるいは、人生や人間の存在に意味がないのなら「生きて苦勞するまでもない」と判断することもありうる。人が自殺に踏み込むのは、生活の中で要求される様々なことをやり続けるうち、あの「何もかも確実ではない」という気づきにより、その習慣や苦勞のばかばかしさを認めてしまうことを前提としているとカミュは述べている。だが自殺もまた、理性や思考の無力を認め、不条理に同意することだ。不条理への同意は人間の理性と世界との対立を崩すものであり、不条理自体を消し去ってしまう。したがって、やはり自殺もまた不条理の問題からの逃避となる。

不条理は私たちに希望を持たせるか、あるいは人間は是非とも死ぬべきかという二つの道しか与えてくれないのだろうか。そこで、カミュは不条理を回避しないための哲学的姿勢を「反抗」と呼んだ。この反抗とは、「圧倒的にのしかかってくる運命の確信——ただしふつうならそれに伴う諦めを切りすてた確信」(p.127)と述べられている。

人生は不条理だという運命を確信したとき、人間の理性の限界によって、また最終的に人生が死によって終わるということによって、日々の営みや習慣というものの虚しさが露わになる。ここで「どうせ人生は無意味なのだから苦勞するまでもない」と諦めの心情が現れることは、決して不自然ではないだろう。しかし、反抗する人間はこの諦めを決して持たず、不条理に対して絶え間なく意識的であり続け、自分が死の方へと日々向かっていることを自覚し、死を意識しながらも自ら死ぬことを拒否することによって不条理を生き抜くのだという。哲学上の自殺あるいは単なる自殺のように不条理と和解し理性を否定することは、逆に全てを合理的に論証可能だと思い込むのと同じように、不条理を消し去ってしまうことになる。だから不条理を保っていくには、それを成すところである理性の要求と葛藤、および世界からの断絶を常に意識することが求められる。

反抗は、人間に感じ取れる事実のみ語り、それ以外の仮説や価値判断は全て確実でないと拒否することで行われる。この世界は人間の理解を超えている、しかしそれ以上に何も言うべきではない。神や予言など人間に理解、証明できないものについては、それは明白ではない、自分にはわからないと言うだけで事足りる。ただしこれは思考の停止ではなく、

不確実なものを定義しようとする判断を拒否することだ。カミュはこうした反抗というあり方に「真の誠実」を見出している。この態度を一貫して生きるとなると、実生活にはどのように反映されるのか。カミュは小説『異邦人』にて、それを書き表している。

3 不条理な人間 —— 『異邦人』におけるムルソーの誠実さ

不条理に基づいて反抗する「不条理な人間」の態度に関するカミュの捉え方は、小説『異邦人』の主人公ムルソーを通じて理解できるだろう。ムルソーはアルジェリアの事務所に勤めている男で、物語は彼の母親の死が電報によって知らされる場面から始まる。

作中において、ムルソーは社会的な慣習や規範に無関心であり、自分が知覚した物事から考えられる意味や、自身の感情を明確に語らない。彼は母の死に感動を示さず、葬儀の翌日は海で遊んで過ごす。社会的な慣習や規範に関して度々他人から意見や返答を迫られても、ムルソーはその都度「どうでもいい」「重要ではない」「どちらでも同じことだ」「何の意味もない」と述べ、無関心さを露わにし、肯定か否定かを曖昧にする。彼は肉体的な要求のために感情を乱される性質であり、関心に向けるのは暑さ、眩しさ、眠気、退屈といった不快から逃れることや、体を動かすこと、親しい女性であるマリーとの触れ合いなど、現在の肉体的な欲求を満たすことや、評判が悪い隣人のレエモンと話が面白いからという理由で関わることにある。周囲の物事を鋭敏な感覚で詳細に述べる一方、それらが何を意味するかは考えない。事実に対し相互関係や意味を与えず、完全に互換しえない言葉は一切換言せず曖昧なままにしておくという点で、ムルソーはカミュが言う「不条理な人間」なのである。

『異邦人』第二部では、マリーやレエモンと一緒に海岸に遊びに行ったムルソーが、レエモンと因縁を持つ女の親族であるアラブ人を殺害した罪によって裁判を受ける。だが裁判の場面では、ムルソーが殺人そのものより彼自身の「人間性」を理由に裁かれる様子が描かれている。検事はムルソーが母親に冷淡に接していた「証拠」を並べ立て、ムルソーが自分の行為の意味を理解したうえで行動できる冷徹な人間であり、だから殺人は計画的に行われたのだと主張する。さらに検事は、ムルソーがとった母親への態度についても「精神的に母を殺した者は、自分に生命を与えた者に殺人の手を下した男と同様、人間社会から離反する存在」と糾弾し死刑を要求する。

しかしムルソーからすれば、そうした態度と殺人は全く結びつかないものであり、彼には世間の人と同様に母を愛していたという自覚がある。だから検事の「論理的な」考えは全くの誤解なのだが、法廷、即ち人間社会においては論理性が絶対視される。殺人の理由を「太陽のせいだ」と言うように、要領を得た意見を述べられないムルソーは、人間社会から排斥されるべき異邦人として扱われることになる。ムルソーは自分が死刑になるとしても嘘をつけないのである。愚かだと言われようと、そのような価値判断はムルソーには必要ない。自分が一貫して正しく生きていることを確信していれば十分なのだ。

死刑宣告を受けたムルソーは、独房で物理的に外界と隔絶され、しかも外界に対する想

像や希望も考えられない。彼の考えは特赦請願や時間の使い方など、徐々に自己の内面へと狭められていく。そんな中、神の裁きに身を委ね、神の姿を見ろという御用司祭の訪問を受けることになるが、神というものに興味がないムルソーは、自身の考えを怒りと共に司祭へとぶちまける。人間はいつか必ず死ぬという宿命を真理として離さないという確信があるだけで、生きている間に与えられるものや選び取るもの、すなわち一切無意味である物事の何より心強い自信となるのだと、司祭に向けて言い放つのである。

しかし、平静を取り戻した後のムルソーは、自分と遠いものである世界に対して、その無関心を「優しい」と理解したかのように感じ、自分の幸福を確信する。最後に望むのは、孤独を和らげるために処刑の日に大勢の見物人に憎悪をもって迎えられることだという。死を前にして、それまで不条理な人間として対立してきた世界に親しみを感じ、死を受け入れ、幸福を見出した時点で、ムルソーの反抗は途絶えたとみられる。ムルソーの態度や殺人については、彼の生き方に背くものではなかった。ただ死刑囚の生活という環境は、不条理な人間の忍耐を挫くのに有効だったのである。

こうした『異邦人』におけるムルソーの顛末から考えるに、反抗には身体的な自由は必要だし、不条理は犯罪を認めるものではないといえよう。さて、ここまでカミュが述べてきた、徹底的に不条理を維持するという誠実な生き方の是非を検討する前に、そもそも誠実とはなんであるかを問い直そう。

4 誠実とは何か

「誠実な行動」「誠実な人」となると、その意味は主に人物に対する良いイメージを示すと考えられるものの、何によって誠実が示されるかは具体的に言い難いところがある。そして実際、誠実にも様々な意味があるように思われる。例えば他人を思いやるためであったり、信頼関係を築くためだったりといった目標や信念があることで、誠実さの意味や行動方針は具体的に定まるようだ。誠実であろうと考えるとき、私たちはどのような誠実を目指すべきだろうか。

学校での道徳の授業においても、誠実について子どもに説く機会があるだろう。中学校学習指導要領においては、誠実とは「自己を確立するための主徳」とされ、「自主、自律、自由と責任」の内容項目には「『誠実に実行』するとは、すがすがしい明るい心で、私利私欲を交えずに真心を込めた具体的な行動」だと書かれている（『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳』（平成 29 年 7 月、文部科学省）p.26）。そうした人物は確かに理想的だが、本心から実行するのは困難ともいえる。また誠実であることに信頼などの価値が付与される限り、どこかにその価値を期待する意図が生じうるし、態度だけ装って本心では利己的な意図を持つということも可能である。そのようなごまかしの余地がある誠実を、真の誠実と呼べるだろうか。そもそも誠実あるいは徳とは、生きやすさや自己正当化のためではなく根源的に人間として正しい在り方を指すのだと思う。ならば、それ自体に拘ることにどんな有用性も価値も伴わない、ただ誠実であること自体

を目的とする誠実を求めねばならない。

こうして道徳や価値から離れた誠実は、カミュが提示したものに戻ってくる。何も偽らずに生きる方法を知るために不条理に出会った私は、軽率な主観や言葉を否定し、物事があるがままに捉えるようにしなくてはならないだろう。私が虚構を崩し、魔境に向き合うとき、私自身を定義してきた言葉や論理、それ自体が私ではないものは、不完全で不当なものとして否定されなくてはならない。しかし、「私」が捉えどころを失っても、世界に溶け込むことができずに戦慄を感じる意識として残り続けていることは確かではないか。既知を取り払っても世界と同じ完全な未知に戻ることはできない、この状態の私こそが、余計なものを持たない「偽りのない私」なのだと思う。こうして、世界との対立を続けること、そのために否定すべきものは否定しなくてはならない。

この確信のようなものに従い、さしあたりは私を何者かに定義したり、私に何かを信じさせようとしたりするものに対して、「弓を引く」という方針を考える。私の人生はほかならぬ私のものとして生きなければならない。たとえ安心や価値を与えてくれるものがあるとしても、それに甘んじて惑わされることなく受容せず、引き続き未知に向き合っていこうと思う。

一方、現実という虚構においては、まず自分から外界に触れることが重要だろう。己を生かすために知識や経験が必要であるという以上に、世界そのものを観察し、自分が何を受け入れ、あるいは拒否せねばならないかを見定めることも必要だと思う。そして、私が自らに命じた精神的態度を保つために現実をどう生きるか、今後はその方がより重要な問題になっていくだろう。大事なことは、やはり絶えず注意を配り、自分で考えるということだ。私を取り巻くものは日々変わっていくし、私の中でまた違った確信が現れないとも限らない。

おわりに

本研究では、カミュが打ち立てた「不条理の哲学」の根本思想を解釈して整理し、誠実な生き方について考察した。現代社会における困難はカミュが生きた20世紀の社会とはまた異なっているが、一人一人がどうすべきか、どうありたいかと生きる方法を自ら見定め、そして実際に辛抱強く生きなければならないという点において、カミュの問いかけは現代の私たちにも鮮烈に響くものである。

本研究は「カミュの『不条理』に学ぶ」ということで、主に不条理を題材とするカミュの初期作品を参考に論考を進めた。「誠実」「反抗」といった言葉に関するカミュの解釈をより明らかにするため、原語によるテキストの読解や、社会的生活における不条理と人間の在り方により深く切り込んだ『ペスト』『反抗的人間』等、他の著作にみられる考えも参考にしながら、テキストを通じて当時のカミュと「共に考える」ようにしていくことが今後の課題である。

参考文献

本論文における『シーシュポスの神話』、『異邦人』からの引用は、新潮社版『カミュ全集2』（佐藤朔・高島正明編、1972年）を参照しページ数を示している。それ以外の文献からの引用については、都度出典とページ数を示している。

また『異邦人』の解釈に関しては、1954年（2014年改版）の窪田啓作の翻訳（新潮文庫）も参考にしている。

1. カミュ『シーシュポスの神話』 清水徹訳
2. カミュ『異邦人』 中村光夫訳
3. 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳』（平成29年7月）